

武蔵野日曜聖書講筈

恵福八相

——マタイ伝第5章1～12節——

1993年4月25日

小池辰雄

恵福なるかな 無者キリスト キリスト自身の告白 無的実存 柔和なる者 憐れみある者
心の清きひと 義のために責められたる者 今ここが天国

【マタイ5】

- 1 イエス群衆を見て、山にのぼり、座し給えば、弟子たち御許にきたる。
- 2 イエス口をひらき、教えて言いたもう、
- 3 幸福なるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり。
- 4 幸福なるかな、悲しむ者、その人は慰められん。
- 5 幸福なるかな、柔和なる者、その人は地を嗣がん。
- 6 幸福なるかな、義に飢え渴く者、その人は飽くことを得ん。
- 7 幸福なるかな、憐憫ある者、その人は憐憫を得ん。
- 8 幸福なるかな、心の清き者、その人は神を見ん。
- 9 幸福なるかな、平和ならしむる者、その人は神の子と称えられん。
- 10 幸福なるかな、義のために責められたる者。天国はその人のものなり。
- 11 我がために、人なんじらを罵り、また責め、許りて各様の悪しきことを言うときは、汝ら幸福なり。12 喜び喜べ、天にて汝らの報は大なり。汝等より前にありし預言者等をも、斯く責めたりき。

● 恵福なるかな

- 1 イエス群衆を見て、山にのぼり、座し給えば、弟子たち御許にきたる。
- 2 イエス口をひらき、教えて言いたもう、

この「山」というのは、いわゆる山ではなく、丘みたいなもので、ガリラヤ湖の多分北の方でしょう。ルカ伝では、キリストは立って話したように書いてますが、「坐し給えば」というのがむしろ本当でしょうね。マタイ伝は非常に整然と書いてあります。

キリストは「口をひらく」前に、天を仰いでいらつしやるはず。必ずキリストは神さまを仰いでからものを言います。

- 3 幸福なるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり。



これは訳があまりよくない。「さいわい」という書き方が「幸福」ではいけない。そこで私は「恵福」と書く。これはむしろ

「恵まれたるかな」

と訳してもいいくらいです。ドイツ語でいうと、「ゼーリツヒ」という字で、「グルエックリツヒ」という字ではない。ラテン語の「ベアティチュート」という字、英語でいうと「フェリシテイト（祝福されたる）」という字です。それがこの

「恵福なるかな」

です。

「心」は霊、「プネウマ」という字です。これは「心」でも悪くはないけれども、「霊」とはつきり書いた方がいい。

「霊の貧しき者たち」

という複数になっている。「天国」も複数なんで、

「諸々の天の国」

ということ。

「恵福なるかな、霊の貧しき者たち。諸々の天の国はその人たちのものである。」

というのが文字通りの訳です。第一声が、「恵福なるかな」という、まさによき音信、楽しき音信です。福音というのは「楽しき音信」ですから。

ところで、「霊が貧しい」ということは非常に大事なことです。この貧しいというのは

「乞食のようだ」

という字です。ドイツ語で「ベッテルアルム」という。乞食のように何も持っていない。

良寛りょうかん和尚もまさに霊の貧しき人です。彼のお母さんは佐渡の相川で生まれた人で――私の父の故里ですけれども――彼のお父さんは商人で、芭蕉ばしやうの流れの俳人でもあった。良寛は実に才能の豊かな人で、よく多読もし、しかも熟読している。ただ、経世の才能は乏しいから、金銭かねのことはわからない。もともと禅坊主で、禅の根底は無ですから。

● 無者キリスト

私はキリストのことを「無者」、「無者キリスト」と申し上げる。何事も無が土台にならないければダメです。これは虚無ではない。私のない無私、いわゆる我がとれている世界です。これは即無限無量です。本当の無だと、これは無限無量に通ずる。無即無限無量ということ。これの最大のひとはキリストです。キリストは、

「自分は何も言えない、神さまに言えと言われることを言っているだけだ。」

何もできない。神さまの力でやっているだけだ」

とはつきり、ヨハネ伝6、7章の所に書いてある。私がキリストのことを無者と申し上げるのはそういうわけです。世界中で、キリストのことを無者という人は、おそろくないで



しょうね。私は、いわゆる神学でも何でも無い。本当の現実をただ言っているだけののはなしです。

神さまが一切だから、

「自分は何者でもない」

と言ったキリストは、

「父と我とは一つなり」

と言った。非常に短い聖句で、たった三字です。完全に自分がないと、100%に神さまが入ってくる。だから、

「我を見し者は父（神）を見しなり」

と言えるわけです。彼が本当の無者だから。

禅宗では、無の世界を無念無想で悟ろうとしている。禅宗はなかなか大変ですよ、その角度はいいけれども。しかし、それは弥陀の本願の力で無とされるような角度になれば、ほんものなんです。自分で無となろうとしたら、それは大変なことだ。

本願の力を受けとって、本当の無の世界に入ったのが一遍上人です。私は一遍というのはすごいやつだと思っている。一遍は法然、親鸞の浄土宗の流れだけれども、法然、親鸞をもっと上まわっている。その相においては、禅宗と似ている。

本当の世界にいくと、もう、何々宗ではない。我々はキリストの世界でキリストの十字架でもって無を賜っている。悟ったのではなく、賜っている。賜りたる無なんです。相対的人間小池はダメだけれども、その奥に無者小池がいるわけです。無をいただいている。賜りたる存在なんです。この無者は、キリストの十字架がくださった無者だから、誰が何と言おうと仕方がない。

そして、そこが必ず聖霊の世界と通ずる。だから、無即無限無量の無限無量は聖霊の世界です。十字架と聖霊は離すことができないということがわかる。十字架で無を賜ったら、無限無量の聖霊がやって来た。それが、

「恵福なるかな、霊の貧しき者」

ということ。キリストは霊が貧しい。神一点張りですから。

●キリスト自身の告白

キリストは、

「わが意にあらず、汝の御意を成させたまえ」

と言って、父の御意に提身している。そして、それを本当に実行された。それを100%実行できるのはキリストだけです。だから、

3 幸福なるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり。

というのは、キリスト自身の告白なんです。この恵福八相は実はキリスト自身の、自分の



八つの在り方を告白していらつしやる。教えているのではない。本当の教えというものは根底に告白を持たなければダメなんです。告白のできないような、頭でものを言っているような教え方はダメです。そんなものは人を動かすことはできない。

イエスは1節から12節でもって、ご自分の八相を告白していらつしやるわけです。まさにイエス・キリスト自身が徹底的に「霊が貧しきひと」です。「もろもろの天国」はキリストのもの。キリストの在るところに天国があるのだから。

4 幸福なるかな、悲しむ者、その人は慰められん。

キリストは宇宙的な悲しみをもったひとです。イザヤ書53章に預言されているところの悲しみのひと、悩みのひと、みんな人のために背負っているわけだ。普通の人間には罪の悲しみがあるけれども、キリストには罪の悲しみはない。けれども、そういう世の罪をむしろ悲しんで、

「どうしてもこれは贖罪しよくざいしなければならぬ」

という意味の悲しみでありましょう。

キリストは神さまに慰められる。私たちはキリストに慰められる。讚美歌513番に、

「ひとは棄つれど きみは棄てず」

という句がある。そのキリストに慰められる。

とにかく、キリストを相手にしていれば、絶対に行き詰まらない。人間というのはすぐ横を見て、

「ああだ、こうだ」

と、いろいろな相対的な問題ばかり気にしている。そんなものはいくら気にしたってどうにもならぬ。キリストに立ち向かっていけばいい。全部とけてしまう。問題ごと、とけてしまう。問題なんかあったって一向差し支えない。それを超えた世界に入るから。超相対の世界に入る。即ちこれは絶対界です。キリストとの相対は絶対界になる。

どんな時でもいいから、「主さま！」と全身でもって魂の底からキリストに叫びかける。もうその瞬間に全部、相対的次元を乗り越えてしまう。何がどうなっても、一向差し支えない。それが本当の無者の世界なんです。

我々の悲しみは罪の悩みの悲しみだとか、運命の悲しみだとかいろいろあるけれども、それをそのまま問題にしたらダメなんです。とらわれてしまう。その問題があるがままでキリストの中に入って行く。そうすると、問題がありながら、もうそれを乗り越えてしまいうから、勝つてしまう。これが福音の、喜びの音信の凄さです。もうよくよくよしくなくなる。無一物無尽蔵という言葉があるが、その無一物無尽蔵的になるわけです。

● 無的実存

アッシジのフランチェスコがやはりそうです。彼は商人の子だけでも、若い時はいろ



いる脱線もしたき。けれども、とうとう突き抜けてしまって、本当に愛を身につけた人です。何ごとも身につけていなければダメです。「愛する」なんていう意識がなくなつて、万象を愛する。木の葉っぱでも。良寛もそうです。良寛とフランチェスコはその点では似ている。そして、両方とも托鉢僧たくはつだ、行脚あんぎやして歩いている。アッシジにおさまったのは後のはなしで、行脚している。何も持たないで行脚する。一遍もそうだ。托鉢というのは素晴らしいことだ。フランチェスコも、ドミニカヌスも托鉢です。ただ立っていないで歩き回っていればいい。良寛はお鉢一つしか持っていない。

皆さんや私も、別に托鉢僧的なことはしませんけれども、その気持は忘れてはダメです。こちらは良寛、向こうではアッシジのフランチェスコ、これが托鉢の一番素晴らしいですがたです。両方とも愛なんです。愛の存在。何といつても、キリストから来ている愛は最大の力を持っている。

とにかく、アッシジのフランチェスコとか良寛がいかに無的な実存であつたか。行脚して、特別なお説教なんかしない。その姿で人が、何か知らないが、打たれるわけです。子供たちをよく相手にした。良寛は子供に限らず、遊女でも何でも相手にした。誰でも同じように愛している。差別しない。だから、何のかんのと人に言われる。言われたつて一向平気なんです。本当の世界を歩いているからね。

そういうのが本当の無の世界です。本当の無の世界は天的な自由をもっている。それは常識的な判断ではわからん。これが本当に「霊が貧しい」ということ。乞食の如き霊です。そうすると、

「天国——諸々の天、神さまが愛をもって支配する所——はその人のものである」

と。天国人である。無者が本当の天国人なんです。その最高なる者がイエス・キリスト自身です。

● 柔和なる者

幸福なるかな、柔和なる者、その人は地を嗣がん。

「地を嗣がん」とは新天新地のこと。ヨハネ黙示録の最後のところ。キリスト自身も、

「我は柔和なる者」

とおっしゃっている。穏やかなひとのことです。

根底に無があると、この八相がみなここから出てくる。

『大地の分配（タイトルング デア エルデ）』というシラーの詩があります。詩人が一番遅れてやって来て、どこかをもらおうと思つても、いただく所が何も無い。皆、土地が分けられてしまって、もう土地がない。そうしたら、神さま（ゼウス）が、

「お前は私と一緒に天にいればよい」



と言った。ということ、詩人は天界をすみかとする。魂は天界にあるものだ、この世のことを問題とするな、ということ。詩人という者はそういう気持ちでいなければダメだというわけです。

大体、地上は権力武力で取ったりかすめたりしている。ところが、柔和なる者、そういう争いをしない穏やかな者は、「地を嗣がん」という。女の方がまず本当の新天新地の良い所をいただくだらうね、男は悪い奴が多いから。

⁶ 幸福なるかな、義に飢え渴く者、その人は飽くことを得ん。

「義」とは創世記15章6節に、

「アブラハム、エホバを信す。エホバ、彼を義となしたまえり」

という句がある。アブラハムがエホバに「然り(アーメン)」と言ったら、「義(セデック)」を神さまがくださった。何も、アブラハムは「義に飢え渴いた」のではなかったけれども、義をいただいた。この場合の「義に飢え渴く」の義は神さまの義です。私たちにとっては、キリストの義です。

「義人なし、一人だになし」

「ただキリストだけが義人だ」

とパウロが言った。だから、「義に飢え渴く」とはまさに

「キリストに飢え渴く」

こと、キリストという義人に飢え渴くことです。そうしたら、キリストは必ずくださる。「飽くことを得ん」という。聖霊のキリストは100%に一人ひとりに無条件に臨んでくださる。

「お前はどうかこうだ」

なんて、そんなことは一つも聞かない。無条件の恵みですから。十字架で贖罪したようなキリストですから、

「こちら側のどうかこうだ」

なんて、そんなことは問題にしない。だから、そのキリストの義は同時に愛なんです。その義、その愛に圧倒されるわけだ。キリストの義・愛に圧倒される。

「私はこんなしょうのないやつです」

と言って、キリストの前に平伏します。そうすると、上から光がくる、力がくる。十字架で無を賜ったから、相対的人間小池はしようがない野郎でも大丈夫なんです。良寛も人の毀誉褒貶きよほうれんは問題になかった。そういうひとが逆にひとを皆救ってしまふ。

キリストという義人――神を、義を体現したひと――これに飢え渴けば、キリストはこれを無条件でくださる。くださることが愛である。

「その人は飽くことを得ん」

これはキリスト自身が神さまをこのように受けとっているということ、キリスト自身が我々一人ひとりにかく語りかけているという角度で読んでいかないとね。



「私はそうなれません」

なんて言ったらダメです。「なれません」ではない。これは全部、恵みなんだから。

「無条件にいただきます。こちら側は問題にしません」と言つて、全部いただけばいい。

キリストという義に飢え渴く者、その人は必ず飽きます。「飽くことを得ん」とは充分あふれるように満足することです。

● 憐れみある者

7 幸福なるかな、**憐憫ある者**、その人は**憐憫を得ん**。

「憐れみ」はどうしてできたんですか。キリストの無条件の憐れみにつかつたから、憐れみある者にならざるを得ない。

よく、クリスチャンがクリスチャン同士で何のかんの言っている。私は言うんだ、

「十字架の下に立て。そうすれば問題は解決する。十字架抜きで、何のかんのと問題にするな。キリストの十字架の下に立て」

と。十字架は必ず聖霊が覆っていますから。

あなた方は「**遺れる民**」で大事な民だから、この福音をしつかり証ししていただく。みな、責任と光栄を担っている。「遺れる民」というのはイザヤ書にある言葉だが、あなた方は本当に遺れる民だ。「遺れる」とは使命と栄光を持っているということです。神さまのために、福音のために使命と栄光を持っている。男でも女でも、老いたるも若きもみなそれぞれ本当の証しをしていかなかったらダメです。証しをしないと、自分自身が腐ってしまう。

福音の世界は遠慮は要らん。どうも日本人は遠慮が多すぎる。遠慮なく言えば、本当のことは人を打つ。それを受けとらなければ、受けとらない方が悪い。自分で天国の門を閉じているわけだ。

「やどかせぬ人のつらさを情にておぼろ月夜の花の下ふし」

宿を貸してくれないので、おかげさまで桜の木の下でいい一夜を暮らしました。無愛想な人の心をむしろ情けと思つて、桜の花の下で寝てみたら大変結構でした、どうもありがとうございます。蓮月の歌がある。

親鸞が、

「泊めてください」

と言ったら、婆さんが戸を閉じて、

「あんたみたいな乞食みたいな人を泊められるか」

「さようでございますか、それでは軒下に寝かしていただきます」

婆さんは気がとがめて、夜中に戸を開いてみたら、親鸞の身边に光がさしていた。いや、



驚いた。そこに土下座してしまった。親鸞が明け方に目が覚めて、

「あんたはそこで何している」

「いえ、先程は大変失礼しました」

「いや、大変こちらはありがたいとうございしました」

「お茶を飲んでいってください」

「いえ、結構でございます」

と親鸞はとことこ行ってしまった。

「空の鳥にはねぐらあり。狐は穴がある。人の子は枕するところなし」

キリストは枕する所がない、まさに行脚坊主あんぎゃなんだ。裸足はだしで歩いている。ところが、イエスというひとはどこでも枕にする。

私なんかいろいろなものをいただいで、申し訳ないものだが、けれども、

「有れども無きがごとし」

という。有れども無き世界に自分を入れていなかったらダメなんです。それでなければ、私の中に福音は生きない。腐ってしまう。私はいわゆる聖書解釈も神学も何も要らん。ただキリストを告白するだけです。

●心の清きひと

。幸福なるかな、心の清き者、その人は神を見ん。

それは無雑なんだ、青天白日なんだ。夜、雲の無いときに、星がたくさん出ている、お月さんがよく見える。そういうのが「心の清き」ということ。「清き」ということのもう一つの面は、全然偽りが無いということです。偽りなし、構えなし。構えていたらダメです。塚本虎二先生という人は構えのない人だった。藤井武先生はちよつと構えがあったな。なぜかという、先生はしよつちゅう「真実」ということを言っていた。

「真実でなければいかん」

と。「でなければならぬ」とか「でなければいかん」とかいうような言い方は本当はいけない。そうすると、「真実」にこだわると、こだわったらダメです。

結局全部、無の世界です。心が分裂するから、偽りになる。すべて開け放し。孟子もうしが言った言葉にそんな言葉があったような気がする。「放心」と書いてあったかな。心を放つ。とやかく思うなど。開け放しがいい。

。幸福なるかな、平和ならしむる者、その人は神の子とと称えられん。

「平和、平和」と言って一生懸命にやっているね。

「平和、平和」

なんて言っても、さっぱり平和は来ない。縦の線が大事なんです。「平安」です。神・キリストとの関係がちゃんと立っているのを「平安」という。「シャローム」というヘブライ語



は平和と平安の二つの意味がありますけれども。

「シャローム レカー（あなたに平安あれ）」

ということとは、

「神さまとの間がちゃんと平安であれ」

ということ。「さようなら」とか「こんにちは」というあの「シャローム」という言葉は平和ではなく、むしろ平安なんです。

士師記6章21～24節に、

「21 エホバの使、手にもてる杖の末端を出して肉と無醜パンに触れたりしかば、巖より火燃えあがり、肉と無醜パンを焼き尽せり。かくてエホバの使、去りてその目に見えずなりぬ。22 ギデオン是において彼がエホバの使者なりしを覚り、ギデオンいけるは、ああ神エホバよ、我面を合せてエホバの使者を見たれば、はた如何せん。23 エホバ之にいたまいけるは、心安かれ怖るる勿れ、汝死ぬることあらじ。24 ここにおいてギデオン彼所にエホバのために祭壇を築き、之をエホバシャロムと名けたり。」（士師記6・21～24）

とある。「エホバ シャローム」とは

「平安の神」

という意味です。平和ではない。

「平安を与えてくださる神さま」

です。平安なき所に本当の平和はない。平和運動なんかしないで、平安運動をしなければダメです。

神さまとの平安があれば、「平和ならしむる」ことができる。平安がなければ、平和ならしめることができない。平安があれば、そこに本当に神の国を出すから、

「神の子と称えられん」

と、まったくその通りです。

「平和ならしむる」

よりもむしろ

「平安を与える」

と言った方がいいくらいです。

●義のために責められたる者

10 幸福なるかな、義のために責められたる者。天国はその人のものなり。

キリストはまさに義のために最も責められ、とうとう十字架に架かってしまった。

「今日、お前は私と一緒にパラダイスだよ」（ルカ23・43）

と、片一方の盗賊に言った。十字架に架かって殺されながら、



「私は天国に往くんだよ」
と仰った。キリストの復活とは息を吹き返したことではない。本来ものすごい霊的な生命のひとが、この霊的生命をただそこに別な形で現わしただけのはなしだ。「復活」なんていう言葉はダメだ。

キリスト自身がまさに

「義のために責められたる者」

なんです。これはキリストの八相の最後だ。全部これはキリストの自分の告白です。そのように、キリストの告白を自分の告白として受けとるようになってこないとダメです。しかも、それは必ず受けとれるんです。

「これはとてもできない」

ではない。キリストを受けとると、この八相は我々一人ひとりの魂の相になる。そういう受けとり方をしないと、本当に読めない。

「キリスト教」では絶対がない。「キリスト道」、道なんです。

「キリストの道をキリストと一緒に歩きましょう」

ということです。

11 我がために、人なんじらを罵り、また責め、詐りて各様の悪しきことを言

うときは、汝ら幸福なり。

と。ちゃんとキリストは状況をご存知なんだ。

12 喜び喜べ、天にて汝らの報は大なり。汝等より前にありし預言者等をも、

斯く責めたりき。

「お前たちは使徒になれ」

ということ。やがて出る使徒たちがこれと同じだから。だから、

「私たちは使徒的信仰で行きましょう」

と言っているわけだ。カトリックでもプロテスタントでも何でもない。使徒的信仰である。キリストの直弟子の次元、キリスト直結です。いかなるヒアラルキー（宗教組織）にも縛られない。

「全部、ご自由にどうぞ」

ということですよ。

●今ここが天国

この恵福八相が、キリストの八相が、我々自身の八相になりましたか。全部これはキリスト自身の相なんです。そして、我々一人ひとりがこの八相をもたなければ。一人ひとりがこの八相をもっている。本当の無の土台に入ると、

「それでも結構でございます、ありがとうございます」



というわけだ。

「我がために、人なんじらを罵り、また責め、詐りて各様の悪しきことを言うときは、汝ら幸福なり。12喜び喜べ、天にて汝らの報は大きなり。」

「天にて報いは大きい」けれども、もうひとつ、

「今、現にうれしいよ。天国は今、現にこの境地にあれば、そこが天国だよ」

と、もういつペンキリストに言ってもらいたかった。我々はどこへ行こうが、どうなるうが、いつも天国の中にいる。天国を現象している天国人だ。地上にありながら天国人だ。クリスチャンではない。天国人だ。キリストと同じように私たちは天国人です。

「天国は汝らのうちにあり」

とキリストが言ったでしょ。

「末の世にはない。今、現に天国の現実をいただいて、周りに天国を展開しながら歩いていきます。そうしたら、歴史の終りには、今度は新天新地の天国に入れます」

と、こういうわけだ。地上で天国を現じていないで、なんで、終りに天国に入れるか。天国を現じながら、我々は天国人だ。あるいは、天地融合人と言ったっていい。

「私は天地を融合しています」

と。それは聖霊の世界です。聖霊はまた「気」という字です。霊は氣に通ずる。大気、霊気。聖霊の世界は霊気の世界です。

自然界は大気の世界。大気は一切のものを包摂して、その中に浸透してくる。この部屋の中にも大気がきている。地球上の大気と相連なっている。これをもし完全に切ってしまうたら、我々は窒息してしまう。キリストの霊気と一緒にんだ。地上にありながら、天界に入っている。アブラハム、イサク、ヤコブ以下の天界にいるところの人たちと、魂の世界では相通ずる。過去も現在も未来もありはしない。本当の永遠の今だ。素晴らしくて、もう何とも表現できない…(異言)…

「地上でもう既にお前たちは天国人だぞ」

と。福音書を開いて、キリストが天国を展開しながら歩いているということをはつきり身体に感じなければダメです。

「キリストの言葉、キリストの行為おこない」

なんて言って、ただ分析して読んでいたらダメ。

「キリストは天国を現じながら歩いているなあ。うれしいなあ」

と言って読んでいく。福音書なんて言わなくて、「天国書」と言ったっていい。マタイの天国書、マルコの天国書、ルカの天国書、ヨハネの天国書というわけです。

